

## 野生種の支配者は誰？

小川 潔（JWCS 理事／東京学芸大学名誉教授）



5年ほど前だったか、遺伝子を主役にしたSFホラー映画がはやったことがあった。遺伝子が支配者あるいは演出者で、遺伝子の命令に従って動く生物体は使い捨ての遺伝子キャリアーまたは演技者という位置づけを私は連想した。また、私が研究対象としてきたタンポポ類のあり方をベースにしたホラー小説もできないかと空想したものだ。

現在日本中（世界中と言ってもよい）で見られる外来種、いわゆる「セイヨウタンポポ」は、受精をせずに種子をつくる。オランダのタンポポ学者であるステルクさんの言葉を借りれば、「父親のない植物」、母系集団である。生まれた子孫は親の遺伝情報をそっくり受け継ぐ。まさに親のコピーである。一方で日本の平地に自生するタンポポには、教科書通りに受精して多様な遺伝情報を持つ種子をつくる種類が多い。ヨーロッパでも受精するタンポポはいるのだが、少数派であり、受精しないタンポポと同じ形の染色体を持つので、注目の対象ではなかった。

コピーをばらまくタンポポが世界を席卷している。ところが現在の日本では、セイヨウタンポポのほとんどが日本のタンポポの遺伝子を1セット含めて持った雑種になっている。コピーを拒んだことは、DNA支配に対する生き物の側の反逆ではないか。ただ、見方を変えれば、雑種化は、DNAが新たな環境の中で生き延び支配圏を拡大するために生き物に取らせた一見アブノーマルな行動だったとも受け取れる。

ダーウィンは生存闘争という概念を一度使用した後に、批判に応じて適者生存という考えに改めたが、日本では弱肉強食や生存闘争（競争）という言葉が私の学生時代（1960～70年代）まで教育課程で広く使われ、人や国家の倫理観や社会観の中に深く根を下ろしてきた。一極集中の権力構造につながるこの概念からは、生物の多様な存在という現実には行きつけない。

野生生物保全の方法をめぐって、現在では個体数管理といった具合に「管理」という言葉が当たり前のように使われている。本研究会の先輩たちは、管理という発想が支配というおごりになることを危惧してきた。管理というと、対象（野生生物）のすべてを知り尽くして人の考えた範疇に押し込めるような印象を受ける。しかし自然は人の考えの先を生きている。ここ30年ほどの間に、適者生存だけが生物多様性を生む原動力ではなく、偶然性が遺伝子の多様性に大きく寄与してきたことが明らかになった。現代科学の用語では「偶然性」というが、人間と自然との関係で歴史的に使われてきた人間の理解の外のことを表わす表現である「神の手」という用語もピッタリのように感じられる。本研究会の先輩たちが唱え、今も本研究会の合言葉になっている「野生の世界は野生のままに」は、こうした自然界の構造を見抜いていたのであろう。

野生生物保全と野生生物による害・自然のかく乱との折り合い、落としどころは、相手の存在を認めた対応こそが共存であり、撲滅ではなく抑制（実害を低減させること）であろう。野外へ出るときにナチュラルリストが心掛ける、殺虫剤ではなく忌避剤を使用する姿勢である。人が把握できる世界の外にある自然の動的なちからを予感し、そこまで含めて保全対象とすることができる社会をつくっていくことが野生生物保全のゴールなのだと思う。